

# 第二章活用事例

中学校版「心みつめて」 p.142  
かけがえのない生命を大切にしよう p.143

「キミはあちゃんの椿」  
（私たちの道徳 中学校 平成二十六年  
文部科学省）

## 【主題名】 自他の生命の尊重

3-1 「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する心情を育てる。」

【ねらい】 生命の尊さを理解し、かけがえのない生命を精一杯生きようとする心情を育てる。  
《ねらいとする道徳的価値について》身近な人の死に接したり、生命の有限さやかけがえのなさに心を揺り動かされたりする経験をもつことが少なくなつた結果、生命を軽視した軽はずみな行動が見られることがあります。自己の生命の尊厳、尊さについて考え、生きていることの有り難さに思いを寄せ、同様に自己以外の生命を大切にすることが求められています。自他の生命を尊重し、かけがえのない生命を精一杯生きようとする心情を育てることが大切です。

## 導入



「生命の尊さを実感した経験はありますか。それはどのような経験でしたか。」

○生命の尊さを実感した場面を振り返らせて、ねらいとする道徳的価値への導入を図る。そのような経験がないという生徒については無理に考えさせたり答えさせたりしないようにする。

○教師が「キミはあちゃんの椿」を範読する。



「裕介は、なぜ『何のために生きているのかな、生きていても仕方がないのじゃないか』と思ったのだろうか。」

○自分の生きる意味を見失いがちになっている裕介の心情を捉えさせながら、生徒自身にも自分の生きる意味について考えさせるようにする。



「裕介は、広瀬淡窓の生き方や『万善簿』のことを知って、どのようなことを考えたのだろうか。」

○自分と同じような境遇にありながら、自分の人生を切り拓き、一日一日を充実させていった広瀬淡窓の姿から、自分の甘さに気付いた裕介の心情を捉えさせるとともに、どのように生きることが自分の生命を大切にすることなのかを考えさせるようにする。

### 中心発問

「キミはあちゃんの手を取ってぐっと握り締めながら、裕介は、どのようなことを考えていたのだろうか。」

○「椿は最後の最後まで生き切る」という言葉にも着目させながら、自己の生命の尊厳や尊さについての理解を深めさせるとともに、かけがえのない自分の生命を精一杯生きようとする心情をもたせるようにする。

《評価》 自分の生命がかけがえのないものであることへの自覚を深め、自己の生命を尊重しながら精一杯生きていこうとする心情を育てることができたか。

## 終末

○「心みつめて」第一章 p.21の広瀬淡窓の言葉「桂林荘雑詠 諸生に示す」を全員で読み、内容についての教師の解説を聞く。

○「心みつめて」第三章 p.142の詩「命」を、作者の宮越由貴奈さんについて紹介した後、教師が朗読する。その後、p.143の「生命について感じたこと、考えたこと」を書いてみよう。「の欄」に記入する。

○記入した内容については、交流したり発表させたりしなくてもよい。それを前提とすることで、しっかりと自分自身に向き合うことが可能となる場合も考えられる。

## 板書例

生命の尊さを実感した経験

### キミはあちゃんの椿

裕介は、なぜ、「何のために生きているのかな、生きていても仕方がないのじゃないか」と思ったのだろうか。

○ 友達はみな、毎日元気に過ごしているのに、自分はすぐに具合が悪くなり、入院を繰り返していることがつらいから。

○ 親に迷惑や心配をかけていることが苦しいから。

○ 元気にもなれず、周りの人に心配や迷惑をかけるばかりでは、生きている意味がないのではないかと思ったから。

裕介は、広瀬淡窓の生き方や『万善簿』のことを知って、どのようなことを考えたのだろうか。

○ 病弱であることよりも、そのことでくよくよしていることの方が、命を大切にしていないというところなのかもしれない。

○ 自分が何をしたいのか、自分に何ができるのかを、考えていなかったから、何のために生きるのかが見えなくなっていたのだ。

○ 広瀬淡窓のように、自分は一日一日を良いものにしてようとしていたのだろうか。人生を充実させようとしていたのだろうか。

キミはあちゃんの手を取ってぐっと握り締めながら、裕介は、どのようなことを考えていたのだろうか。

○ 自分は今、ここに生きている。そのことに感謝して、この命を精一杯使って生きていかなければ。

○ 一日一日、一つ一つのことを大切にして充実させていくことが、自分の人生を充実させることにつながるのだ。それが一生懸命に生きていくということなのだ。

桂林荘雑詠  
諸生に示す  
広瀬淡窓

「心みつめて」  
第一章 p.21

命  
宮越由貴奈

「心みつめて」  
第三章 p.142

### 《評価》

生命の尊さを理解し、かけがえのない生命を精一杯生きようとする心情を育てることができたか。